

神田秘帖

「7. 日本透析医会と臨床工学技士」 山崎親雄

透析黎明期には、透析液供給装置の保守・維持はメーカーが担当していた。しかし透析施設が急速に増加するなかで、その役割は、施設に所属する技師（いろいろな呼称があった）が担当するようになった。

昭和50年には関東地区で透析技術交流会が設立され、昭和55年には将来の資格認定を見込んで、日本透析療法学会など5学会が参加した透析医療合同専門委員会による講義と試験が実施され、透析技術認定士が誕生した。

厚生省では、これら臨床現場からの要請を受け、義肢装具士などとともに臨床工学技士の国家認定が検討され始めていた。

こうした背景下で、昭和58年、透析技師（この時点では無資格者）による内シャント穿刺が問題となり、急速に国家認定への準備が加速された。昭和62年3月には、CE（Clinical Engineer）合同委員会が、透析技師の国家認定に関する要望書を厚生省に提出したが、そこには当時の透析に関する資料が添付されていた。それによれば、全国の透析施設は1,587施設、透析患者数は66,310人、毎年おおよそ6,000人の患者が増加し、最終的透析患者数は12万人程度となると推測している。また、この透析供給体制を維持するためには、当時約5,700人が透析技師として就業していたが、将来は約10,000人が必要とされていた。

そしてついに、昭和62年6月には臨床工学技士法が制定され、昭和63年3月には同法が施行されることになった。最も象徴的な業務が、「血液浄化装置の穿刺針その他の先端部のシャントへの接続又はシャントからの除去」とされたことは、その後のコメディカルスタッフの透析業務を大きく変えるものであったことはご存じの通りである。

ちなみに、一カ月後の7月1日に、厚生省は日本透析医会の法人化を認可しており、法人化された日本透析医会にとって、臨床工学技士の国家認定は最初の重要な活動目標となった。

同年8月には、厚生省健康政策局により臨床工学技士養成施設等基準検討委員会が招集され、日本透析医会からは鈴木満常任理事が委員に就任した。なお、虎の門病院時代の三村信英先生も委員として指名されていた。この委員会の検討事項は、教育施設基準、教育内容、受験資格の明確化などで、特に日本透析医会にとっては、現任者に対する国家試験受験のための救済処置（経過処置）の内容が重要であった。

実際に提示された受験のための講習会は、財団法人医療機器センターが実施し、具体的には連続あるいは土・日開催、15日（10時間/日）の講義と別に臨床実習、開催地は東京で2回・大阪で1回、1回370名前後、受講料14～15万円とされた。参考までに、受講料に関連して、当時の大学初任給が153,100円であっ

たことから、現任者にとっては妥当な額だったかと思われる。また、受講資格については、臨床の現場で5年以上の経験を有すること、大学受験資格以上の学歴を有すること（准看は中学卒でも可）となっていた。受講資格について、透析療法合同専門委員会は、5学会認定の透析技術認定士の講習免除を要望したが、受け入れられることはなかった。ただ日本透析医会は、医療機器センターが予定したわずか3カ所で、しかも連続16日間という日程では、約6,000人の現任者の講習受講は不可能であると考え、広く各地での開催を要望した。最終的には医療機器センターが日本透析医会へ各地区で講習会開催を委託し、これを受けて、北海道・青森・岩手・宮城・新潟・東京・千葉・長野・愛知・大阪・兵庫・徳島・高知・福岡・大分の各都道府県で開催された。受託した日本透析医会関連の講習会受講者は、おおよそ1,700人であった。振り返ってみれば、開催された地区はいずれも都道府県連合会当時から医会支部として活動していた地域で、カリスマ性の高い（優れた指導力を有する）医会理事が存在していたところであったと考えている。

最終的に、昭和63年11月6日に第一回国家試験が実施され、3,791人が受験し、2,670人が合格（合格率70.4%）、我が国初の臨床工学技士が誕生した。卑近な例ではあるが、当院では11人が受講・受験し、10人が合格したが、今でも、少なくとも6人が就業している。

いずれにしても、今や、患者10人当たりの職員数で増加し続けているのは臨床工学技士のみである（日本透析医学会の統計調査報告から、この調査項目は削除されたと聞いている）。看護師の雇用が困難なこともあるが、臨床の場で期待されている職種であることも間違いのない事実である。個人的には、チーム医療の一員として装置の保守点検・生命維持装置装着時の業務の他、インシデント・アクシデント管理、災害時対応、患者データ管理など幅広い業務を期待している。

なお、日本透析医会が受託し、各支部で実施された講習会の余剰金で、災害対策用コンピュータが導入されたことは別の機会で、

日本透析医会名誉会長/増子クリニック 昴